

日本・インドネシア・コンテンポラリーダンス共同制作事業レポート

# 相手に踏み込み、踏み込まれつつ、 徐々に穴を開けていく

この6月、ジャパンフアウンダーシヨンはパバ・タラフマラ、ケローラ財団（インドネシア）との共催により、インドネシアで日本・インドネシア共同制作舞踊作品『ガリババの不思議な世界』の公演を実施した。今回のプロジェクトについて、パバ・タラフマラを主宰する小池博史氏に報告いただいた。

こいけひろし  
小池博史  
パバ・タラフマラ主宰

この時代、この世界は、300年前に  
スウィフトが描いた世界と同じだ

『ガリババの不思議な世界』はパバ・タラフマラ「スウィフト・プロジェクト」第2弾として、09年6月7日、ジョグジャカルタのタマンブダヤ・コンサートホールで幕を開け、11日、12日、ジャカルタのタマン・イスマエル・マルズキ（以下、T・I・M）での公演を終えた。本文は、発案から一通りのプロジェクト終了までについてである。

はじまりは、ずいぶん昔、30年前にまで遡る。『ガリバー旅行記』や『奴婢

こいけひろし●演出家、作家、振付家、美術家、写真家。1982年、P.A.I.・タラフマラ設立。以降、全51作品を制作。演劇、舞踊、オペラ、美術、建築など、ジャンルを横断しながら作品を制作。一般市民との作品制作や海外公演も多い。95年P.A.I.・タラフマラ舞台芸術研究所（P.A.I.）設立。若手パフォーマーの育成に力を入れている



『ガリババの不思議な世界』の舞台より。ダンサーは、パバ・タラフマラの2名とインドネシアでオーディションによって選ばれた11名。右は影絵師のスラメット・グンドノ

写真提供：Hiroshi Koike（以下同じ）



訓』などの作家、ジョナサン・スウィフト自身に焦点を当てた作品をつくらうと考えた。しかし、そのまま記憶の底に沈んで、長い年月が過ぎ去り、消去されるかに思えたそのとき、再びこの奇人が突然、脳裏に浮かび上がった。今、この時代、パラドックス満載で、瀕死の状態に陥っている世界は、30年も昔、怪人スウィフトが描いた世界と同じではないか。それどころか、科学技術を凌駕するだけの思想を持ち得ないまま、脳の一部だけが肥大化した人間が、ますます妙ちくりんな存在になってしまっていることを多くの局面で実感し、その男を強烈に笑い飛ばしつつ作品化したいと願うようになった。これが「スウィフト・プロジェクト」始動の理由である。

スウィフトは不可解な人物だ。聖職に就きつつ、政治、社会、人間をあざ笑う文章を書き、逆説、皮肉、懐疑精神、多面的性格のなかに生きた怪人である。このような多面的な人物は一筋縄ではいかない。だから、彼自身をフィクション化し、プロジェクト化しようと考えた。スウィフトの姿形を変え、三つの多面的スウィフト像をつくり出し、文化背景の異なる三カ所で、その背景

を持ったアーティストを主体とし、新たな手法を模索しつつ、創作を行なうという三カ年計画である。

『ガリババの不思議な世界』は「スウィフト・プロジェクト」第2弾に当たる。第1弾は08年、東京で実施、第3弾はアイルランドで10年に行なう予定だ。アイルランドはスウィフトの故郷、一生を送ったケルトの地、インドネシアは西洋が芸術分野に大きくは入り込んでいず、独自性をまだ保っている地、これらが両国を選択した理由である。

**稽古開始までの細かな詰めが成功の必須条件だった**

海外での作品制作をパパ・タラフマラでは何度か行なっている。ただ、すべてを自らが計画して実施するのは初のケースだった。そこで特に気をつけたのは、稽古開始までの細かな詰め、これが作品を成功に導くための必須条件であった。

**稽古開始前に行なった作業を列挙する。**

- 1 カウンターパート探し  
はじめはシアターコマに依頼したが、劇団単位での難しさがあり、アムナ・クスマ氏がディレクターのケローラ財団に変更。アムナとは両国で繰り返し

**会議を重ねた。**

**2 資金の調達**

パパ・タラフマラ、ジャパンファウンデーション、ケローラ財団で主催し、セゾン文化財団から助成を得た。

**3 ダンサーオーディション（日本人2名はすでに決定済み）**

08年10月にジャカルタとソロ（場所名）で実施。72名の参加者から11人を選抜。

**4 スタッフの決定**

スタッフの知識は皆無だったため、アムナの推薦により選択。ただし、美術家はジョグジャカルタのアートセンターでアーティストの資料をすべて見て、3名を選び、面談をして1名選択。衣装家は、稽古途中で変更するという問題が発生した。インドネシア人1名の作曲家を考えていたが、制作時間との兼ね合いと作品の性格上、コンピューター音楽が必要と判断、日本人作曲家を加え、計2名とした。

**5 劇場の決定**

問題が発生し、劇場決定が遅れ、決定したのは公演1カ月前。最終的には、劇場機構と収容人数を優先させた。

**6 金銭面の交渉**

アムナが望んでいたのは大規模作品だったが、大規模作品をつくれるほど

「ガリババの不思議な世界」インドネシア公演

プロジェクト実施期間	2009年4月16日から6月12日
公演日・会場	6月7日 タマンブダヤ・コンサートホール(ジョグジャカルタ) [600席] 6月11日、12日 タマン・イスマエル・マルズキ(ジャカルタ) [850席]
主催	ジャパンファウンデーション、パパ・タラフマラ、ケローラ財団
助成	セゾン文化財団、EU・ジャパンフェスト日本委員会

の予算ではない。よって削減交渉に多くの局面で臨まざるを得なくなった。全員、金よりも気持ちが勝ってくれたので乗り切れた。

#### 7 台本作成&翻訳

台本は09年1月5日に書きあげ、1回目の翻訳は打ち合わせの必要上、1月22日にあがった。しかし、台詞をさらに活かすため、現地トップの日本人翻訳家と、シアターガラシの作家に共同で、リズム感溢れる舞台言語に変えてもらった。

#### 8 音楽制作

実際の稽古日数はのべ36日しかなかったため、稽古開始と同時にドライブ感を生み出しつつ、走り出せるよう、音楽の早めの制作は必須であった。

#### 9 舞台美術の基本構造決定

同様に、稽古開始と同時に動き出すための基本的舞台美術を決定。

#### 10 ダンサーのメンタリテイづくり

稽古開始2カ月半前の2月頭にほぼ全員を集め、作品の詳細や稽古の方法、時間等を示しておいた。問題があとで出ないような段取りを踏む必要があった。

#### 最高のクリエイティブティと 戯れた気分を味わえた

このような準備を行なった上で4月

21日から稽古を開始した。

ダンサーたちはほぼ時間厳守で朝8時から夕方4時すぎまで、ピッシリと稽古をこなしていった。これはアムナによる事前のダンサーに対するレクチャーが大きかった。

稽古上、最も大きな問題となったのは、床の固さである。コンクリートにリノリウム1枚敷いている程度で、日本人にとっては固過ぎる床だ。インドネシア人ダンサーたちは、最初は慣れているから問題ないと言っていたものの、長時間稽古となると勝手が違い、膝や身体に痛みを感じるようになっていった。

また、インドネシアの舞踊は、身体を引き上げるのではなく、地面に重みを落とし込んでいく動きが主であり、力を抜くというより、力を込める動きが基本だから、徐々に身体に負荷がかかっていく。即興で動いてもらうと、男性陣はとて床動きが多い。これは身体の負担が少ないからで、負荷の大きなジャンプなどは誰も好んではやらなかった。

音楽家、美術家、衣装家……多くのスタッフは「こんなに厳しい条件でやったことがない」と言いつつも、無制限と言ってよいほどのアイデア提示が

あった。ゆえに私も限界まで応え、過酷だったが、最高のクリエイティブティと戯れた気分を味わえた。

#### 伝染病による限界状態を超え 公演は成功を収めた

今回の最大の問題は、まったく予期せぬ、病気であった。蚊によって伝染するチクングニヤ熱という病気にやられた者が、参加者のほぼ7割にもなった。発症すると、高熱が出て、関節が痛みで曲がらなくなり、起きていられなくなる。また、公演が近づいてくるにつれ、発症者が増えていったから、最後の方は通し稽古を行なうことすら、ままならない日が続いた。一人の日本人ダンサーはマラリアに罹ったあと、チクングニヤ熱に罹患し、かつ赤痢症状のため衰弱が激しく、本番は限界状態で公演に臨まざるを得なくなってしまった。

しかし、ジョグジャカルタ、ジャカルタともに満席。特にジャカルタでは人気が出て、850席の劇場が2回、ピッシリと埋まり、チケットが手に入らないという状態となった。公演後の批評もたくさん出て、かつ、すこぶる良い批評であった。また、稽古途中、エディンバラフェスティバルのディレクターが偶然見て、すぐに公演可能性



モゾモゾという動物が治めている、人間界の地図にないアンドラントにスウィフト船長が漂着。ガリババと名づけられ、10日間の命の猶予を与えられているシーン

の打診も入った。

ダンサーたちにとつては、相当過酷であつたらう。熱帯地方での稽古は消耗が激しい。その分、私としても、いかに刺激し、新しい試みができるかを彼らに問いかけ、与え、奪い取つたが、それは一種の楽しい闘いであつた。彼らにとつては、そんな稽古が延々と続いたのだから、極めて強いインパクトがあつたと思う。

### 創作には否応なしの 全身体的対処が求められる

さて、こうして、公演は成功裏に終わった。しかし、本来はここからが最も大切である。いかに検証し、活用するかが今後問われていく。以下、本活動の意味について考えてみたい。

舞台芸術は空間、時間、身体が一体となつて進行していく芸術ジャンルである。特に文化圏の違うアーティストたちと一緒に創作活動を行なうと如実に感じるのが、空間の捉え方、時間の感じ方、身体感覚とすべてにわたつての相違である。つまり、全感的に捉えつつ、当方と相手との位相を図つていかないと作品になつていかない。否応なしに、全身体感的対処が求められる。中途半端な踏み込み方をすれば失敗

は必定なのだ。相手に踏み込み、踏み込まれつつ、徐々に徐々に穴を開けていく。その結果、強い相互理解を得て、初めて作品は成功に導けるのである。

これは今後の世界を考えると重要な示唆を含んでいると思う。他文化の理解こそが、今のパラドキシカルな世界を少しでも住みやすくする、そして人間が生き延びていくための大きな手だてとなるだろうということである。もちろん、簡単なことではない。

今、世界は小さくなり、簡単に行き来できるようになった。一方では、圧倒的な格差社会で世界はきわめて大きく広がつてしまった。そして憎しみを生み、テロを生む。それを回避していくための、「理解と認識」の構造が必須なのだ。

だが、通りいっぺんの文化輸出や輸入は単なる鑑賞でしかない。特に古典鑑賞などはその最たるものである。私がこのような創作を希求する理由は、前述したとおり、否応なしの全身体的対処が求められるからだ。それを強く体験するスタッフやキャストはそのエッセンスを必ずや伝播させるだろう。

加えて、観客もまた、単なる鑑賞者ではいられなくなる可能性がある。な

ぜなら、それが素晴らしいものならば、何が混じり、何が対立項となつて、今、ここにこんな作品が生まれたのか、と疑問や賞賛や否認や新たな認識が生まれるからである。

今回、ジャカルタの初日のみ、中学生、高校生に無料鑑賞の機会をつくつた。結果、公演後のトークでは意見が続出し、質問が引きも切らず、ズラリと並んで待つていような状態が生まれた。

今、私たちは世界を考えねばならない。内向きでは成り立たない時代にとっくに入つてしまつてい。しかし、1980年代以降、日本社会は逆走しているように思えてならない。文化は私たちの根幹にある。それを甘く見るとしつぱ返しを食らう。だからこそ、私たち自身を理解し、そして相手を理解しようと考え、このプロセスに、これからの世界の可能性がわずかに残されているように思えるのである。◎



モゾモゾ王と王妃の登場シーン。この国では人間は最下等の動物として扱われている